



ヒトにうれしいコト。



これまで、みなさまに「おいしさ」で
「うれしい」をお届けしてきた私たち、カルビー。
でも、「ヒトにうれしいコト」は「おいしさ」だけではありません。
"美しい音色を聴いて、心が潤う"ことも、
"素晴らしい絵画を見て、心が動かされる"ことも、
私たちの暮らしになくてはならないこと。
これからも「ヒトにうれしいコト」を、カルビーから。

掘りだそう、自然の力。

Calbee

二期会 2011/12 SEASON
ゴールデン
コンサート
in 津田ホール
今、届けたいメッセージ
VOL.35

経種廉彦

MEZZOSOPRANO

2011年10月15日 [土]

16:00開演 15:30開場

御邊典一 PIANO

主催



協賛

Calbee カルビー株式会社

PROFILE

経種廉彦 TENOR

いだね やすひこ

島根県松江市生まれ。東京藝術大学卒業、同大学院修了。文化庁オペラ研修所終了。1989年イタリア声楽コンクールにて金賞を受賞。1991年文化庁芸術家在外研修員としてイタリア、ミラノで研鑽を積む。1990年モーツァルト劇場「後宮からの逃走」でデビュー、「音楽芸術」誌にて絶賛される。新国立劇場では97年オープン以来すでに30本以上のオペラに出演。最近では2008年3月フィリップ・グラスのオペラ『流刑地にて』（日本初演）、5月京王オペレッタ『チャルダッシュの女王』、6月兵庫県立芸術劇場佐渡裕プロデュース『メリー・ウイドウ』、10月新国立劇場『トゥーランドット』、12月池辺晋一郎総監督「横浜みなとみらいジルベスターコンサート」、2009年5月大阪いずみホール ブリテン作曲『カーリュウ・リヴァー』、6月新国立劇場『修禅寺物語』、7月新国立劇場「ジークフリートの冒険」、9月びわ湖ホール ベルク『ルル』、11月国立音楽大学オペラプロジェクト ブッチーニ『ロンドイネ』、2010年2月港区民オペラ『椿姫』、2月日本武道館なかにし礼総監督世界劇「黄金の刻」、6月新国立劇場 世界初演 池辺晋一郎作曲「鹿鳴館」、7月出雲市民オペラ『椿姫』、8月静岡AOIオペラ『カルメン』、11月岡谷市オペラ『御柱』、2011年2月新国立劇場『夕鶴』、4月新国立劇場『ばらの騎士』などに主演。また2006年に新国立劇場で世界初演された瀬戸内寂聴台本のオペラ『愛怨』はDVDとなって発売されている。2001年には1年間「山陰中央新報」のコラム「羅針盤」の連載執筆を手がけた。また2009年東京音楽大学にて学生のためのオペラ『コシ・ファン・トゥッテ』では初の演出を行った。2012年2月新国立劇場、遠藤周作原作・松村禎三作曲『沈黙』に出演予定。国立音楽大学准教授。東京音楽大学非常勤講師。二期会会員



オペラからオラトリオまで優れた音楽性で指揮者からの信望厚いテノールの逸材。



御邊典一 PIANO

おんべ のりかず

三重県二見町に生まれる。信愛学園高等学校音楽科（現・浜松学芸高等学校）を卒業後、東京音楽大学に進む。在学中より演奏活動を始め、国内外の一流演奏家との共演を数多く行い、中でもイタリアの往年のテノール、レオニダ・ベロン氏との共演は好評を博した。またこの頃、青少年のための音楽会にも数多く出演し、全国各地で演奏する。この他、海外での出演も数多く、オーストリア・ハンガリー・オランダ等を歴訪し、フランスのコルマルの劇場に於いてはピアノ独奏、声楽伴奏の両方の役を果たし高い評価を受けた。1996年にはザルツブルクのモーツァルトウム音楽院のサマーアカデミーでさらなる研鑽を積み、98年には中国、オランダ、2000年には韓国、ギリシャ等にも演奏旅行に参加する。最近ではソロ活動にも力を入れ、1999年に初のピアノリサイタルを行い、2001年にはすみだトリフォニー大ホールでグリーグのピアノ協奏曲のソリストとして出演し、その熱演は会場を沸かせた。また名ピアニストの編曲物や、中国のピアノ曲を取り入れる等、独自の企画で音楽会を各地で催し、サロン等で観客とより近い形でコンサートを行っている。東京音楽大学・同大学院専任講師。お茶の水女子大学講師。

PROGRAM & NOTE

※第一部と第二部のあいだに休憩が入ります。

第一部 日本の歌

越谷達之助	初恋	
中田喜直	悲しくなったときは	
山田耕筈	この道	
	鐘が鳴ります	
	赤とんぼ	
	かやの木山	
	六騎	
寺島尚彦	さとうきび畑	篠原真編曲

第二部

トステイ 歌曲による「ある若者の恋の物語」
構成・台本：経種廉彦 照明：矢口雅敏

四月
薔薇
夢
暁は光から
理想の人
君なんかもう愛していない
最後の歌

本日のコンサートでは、冒頭の2曲で、戦前と戦後の曲調の違いを感じて頂こう。それではまず、越谷達之助（1909-82）の〈初恋〉を。石川啄木の詩に曲がつけられ、1938年に発表されて以来、現在まで広く歌い継がれる名作である。ゆったりとした雰囲気貫かれる一曲だが、中間部に現れる装飾的なパッセージで、経種の声がいっそう清らかな境地を拓くさまにご注目頂きたい。そして、戦後派の旗手として、平明で親しみ易い旋律美を駆使した中田喜直（1923-2000）の〈悲しくなったときは〉を（1964）。寺山修司の詩により、海の広がりすべてを委ね、心の再生を果たしたいと願う者の胸のうらが、大らかな旋律美で色濃く造型された一曲である。

続いては、生誕125周年を迎えた山田耕筈（1886-1965）の名曲選を。この作曲家の歌曲の世界には二つの対照的な個性が窺える。その一つは緻密に織り上げた抒情美から滲み出る「静かな緊張感」、そしてもう一つが奔流のごとく連なる音に見て取れる「衝動的な勢い」である。今回、経種廉彦が選んだ5曲はいずれも抒情性豊かなメロディばかりであるが、彼の端正で実直な歌いぶりの中から、耕筈歌曲ならではの張り詰めた音の美学も感じ取って頂ければと思う。

それでは各曲について。歩みつつ、時に立ち止まるかのような「思索の歩調」を思わせる〈この道〉では、作曲家が3拍子と2拍子を巧みに繋げて作り出した、独特の柔らかな流れを深く味わって頂きたい。北原白秋の詩により、1927年の発表以来、今日まで愛されている名曲である。次に〈鐘がなります〉（1923）を。星のちらつく夕暮れに女性が佇み、来ぬ人を待ち続けるという情景が、彼女の切ないモノローグとして歌われる。経種の緻密なフレージングが、メロディに強い哀愁をもたらすさまをお楽しみに。続いて〈赤とんぼ〉（1927）。追憶の田園風景を描いた三木露風の詩によるもので、日本人の郷愁を象徴する傑作として、知らぬ人もない一曲であろう。

ここで、再び白秋の詩による〈かやの木山〉（1922）を。もとはかやの木山と呼ばれ、後に改題されたとのこと。冬の夜にいろいろ端で過ごす家族の温かな心持を伝えるメロディである。ちなみに、「かや 榎」の木の実は炒って食すると香ばしく美味しいという。「とど 粗朶」「はぜる 爆ぜる」といった日本語と共にいつまでも伝えてゆきたい世界である。そして、1922年作曲の〈六騎〉を締め括りに。こちらも白秋の詩によるもの。題名は、平家の落人が六名やってきたという筑後の一村の伝承に基づき、詩の内容は、親鸞聖人の御正忌で寺に参詣する村人が「情人（同地の方言で「やね」と読む）が髪を結って待っている」と独りごちるもの。伴奏部に現れる鐘の音の響きと、歌声の素朴な語りかけにじっくりと浸って頂きたい。

最後に異色の名曲を。NHK「みんなのうた」が世に知らしめた〈さとうきび畑〉である。1965年の作であり、詩と曲はともに寺島尚彦（1930-2004）の手になるもの。合田道人氏によると、占領下の沖縄を旅した作者が戦いの傷癒えぬ風景を目にして書き上げたという。ちなみに、田代美代子、森山良子、上條恒彦といった名手の歌で広く知られるが、筆者の記憶に焼きついたのは、小学生の頃に番組で接した（放送：1975年4月～5月）サトウキビの群生が風に揺れる景色と、ちあきなおみの祈りそのものの声音である。本日で来場の皆様には、経種廉彦の歌がこの曲に与える新たな深みに耳をそばだてて頂こう。

後半は、オペラ全盛期のイタリアに生まれながら、歌曲を作り続けた独立独歩の人、フランチェスコ・パオロ・トステイ Francesco Paolo Tosti（1846-1916）の調べをお聴き頂こう。彼の楽曲は総数400作にも上るといいますが、本日はその中から、経種が選びぬいた7曲がステージに一つのドラマをもたらすという。

まずは、1882年作の〈四月 Aprile〉から。詩はR.E.パリアーラ による。ピアノのアルペジオの上で、春の到来を喜ぶ歌声が弾けるさまに聴き入って頂こう。次も同じくパリアーラの詩による〈薔薇 Rosa〉（作曲：1885）を。本に挟まれた、葉代わりの野薔薇の花にことよせて、愛の切ない想いを歌い上げる一曲。四拍子を三連符で奏で続ける伴奏部に、八分音符を連ねたメロディが寄り添うさまが心地よい。続いて、L.スケッチェティの詩に曲をつけた〈夢 Sogno〉を。作曲は1886年。分散和音が静かに連ねられる中、恋する相手と夢の中で唇を重ねた者が、いくばくかの自制心も示しつつ、飲びの境地をしっかりと歌い上げる。

そして、20世紀初頭の文人ダンヌンツィオの詩による歌曲集《アマランタの四つのカンツォーネ Quattro canzoni d' Amaranta》から第2曲〈暁は光から L' alba separa dalla luce l' ombra〉を（出版：1907）。愛の夜を過ぎた若者の恍惚を清々しく歌い上げる一曲であり、終盤で同種の音型を重ねて盛り上がるさまは、愛に酔う心の高まりそのものであろう。次いで、〈理想の人 Ideale〉（出版：1882）。詩はE.エッリーコによる。ピアノが奏で続ける三連符の澄み切った響きの上で、緩やかなメロディが愛する人に寄せる想いの純粋さを象徴する。

続いて同じくエッリーコの詩で〈君なんかもう愛していない Nont' amo più!〉（作曲：1884）を。愛した女性の心が自分から離れてしまったと嘆く男が、諦め切れない想いを反語的に口に続ける一曲であり、それだけに、本日の経種の表現法が大いに気になるところである。そして〈最後の歌 L' ultima canzone〉を。1905年の作であり、F.チンミーノの詩による。内容は、想いを寄せるニーナが明日結婚すると聞き、矢も盾もたまらずやってきた男が、情熱的なセレナーデを披露するというもの。締め括りの「ああ」のヴォカリーズは、未練という感情を音楽美に結晶させた例としても興味深い。この調べを経種がどのように歌い収めるか、どうぞご注目頂きたい。

オペラ研究家 岸 純信

▶二期会ゴールドデンコンサート in 津田ホール
今後のスケジュール

VOL.36

佐々木典子 SOPRANO 千葉かほる PIANO

12年3月17日[土] 16:00開演 15:30開場

“オール・リヒャルト・シュトラウス・プログラム”